



Title	アルハンブラ宮殿修復史の研究 : 19-20世紀を中心に
Author(s)	佐藤, 紗良
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/61391
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (佐藤紗良)	
論文題名	アルハンブラ宮殿修復史の研究 —19・20世紀を中心に—
論文内容の要旨	
<p>【研究の背景】</p> <p>スペインのアルハンブラ宮殿は、ムスリムによって作られた建築複合体で、当時の様子を留めていると考えられがちだが、実際はイスラムの要素を留めつつも造営当初から常にその姿を変えてきた、スペインの建築修復史が辿った道を知るためのもっとも重要な建築遺産の一つである。アルハンブラ内のライオンのパティオとコマレスのパティオは其中でも修復が繰り返されてきた建築空間の一つで、18世紀以降その様相は大きく変わっている。それはアルハンブラが、その歴史的特性及び芸術的価値のために、東洋趣味と歴史的保存、及び観光などの狭間に立たされてきたためである。その渦中であつたのが修復家の理念と実践であつた。</p> <p>従来の研究ではアルハンブラに同時代のヨーロッパにおける修復理念の変遷そのものを読み取ることが出来るとされてきた。すなわち、当初は修復家が自らの理想を反映させて「完全な」建築物を求める様式主義的アプローチが見られたが、これが次第に排除され20世紀以降に科学的修復態度が主流となる状況のことである。これは建築物を歴史的に正しい形に戻し、修復箇所と古い箇所を明確に区別するという厳格な方法論であるが、アルハンブラ修復においてこの二項対立の枠に入れられ、比較されて論じられることが多いのが、19世紀のラファエル・コントレーラス・ムーニョス (Rafael Contreras Muñoz, 1824-1890) と20世紀のレオポルド・トーレス・バルバス (Leopoldo Torres Balbás, 1888-1960) である。</p> <p>19世紀初頭のスペインは王位継承戦争やナポレオン戦争などを経て不安定な時代となっていた。アルハンブラもそれらの影響を被って荒廃しきっていたが、その退廃的な美はオリエンタリズムの魅力とともに、ヨーロッパ諸国で流行し始めたロマンティズムによって「再発見」される。外部からのこうした「エキゾチックでノスタルジックなスペイン」のイメージが国内でアイデンティティとして受容されたため、王家が修復事業に介入して本格的な修復が始まる。その際に登場したのがコントレーラスであった。またロマン主義の時代が終わり、モニュメントに対する積極的な保存活動が行われ始めた頃に活躍するのがトーレス・バルバスである。前述のように、前者のアルハンブラ修復に対する現在の評価は「ロマン主義的理想に陥り、自らの想像で作った」という否定的なものである。対してトーレス・バルバスは、外的要因への対処を含め「当時出来る限りの保存、修復を行った」と肯定的に捉えられている。本研究はアルハンブラのパティオにおける両者の理論と実践の分析を軸とするが、コントレーラスとトーレス・バルバスの修復を彼らのバックグラウンドや当時の社会的情勢などの様々な観点からも比較し、現在の保存修復の理念を適用した、「誤りのあるコントレーラスと正しいトーレス・バルバス」という評価の枠組みを改めて問い直すものである。</p> <p>【両者の「修復」及び「オリジナル」】</p> <p>コントレーラスの時代には、合理主義や様式的統一性を重視するフランスのヴィオレール＝デュク (Eugene Emmanuel Viollet-le-Duc, 1814-1879) による修復が全欧的に注目されていた。コントレーラスはモニュメントのオリジナルの「性格」を保つことを意識したが、それをヴィオレール＝デュク的な「様式」とし、自身の論拠にしようとした。しかし彼が行った修復を見ると、ヴィオレール＝デュクのような構造面の重視ではなく、建築意匠や装飾などの外見的なものに注力していたのが分かる。すなわち「オリエンタリズムの装飾」を「アルハンブラ的性格」と同一視し、「様相」の回復によって「性格」の存続を意図していたのである。それは彼の商業活動とも結びつき、コントレーラスの工房で作られたアルハンブラの装飾模型は国内外で飛ぶように売れ、それが「アルハンブリズム」を加速させた。</p> <p>一方トーレス・バルバスは緻密な文献調査とともに考古学的な実地調査を行い、詳細な作業日誌を残した上で修復を行った。彼の修復の概念は当時のスペインにおける修復の流れとなり、その理念に添って古建築物の保存、修復が広まった。トーレス・バルバスはイタリアのカミッロ・ボイト (Camillo Boito, 1836-1914) から多大なる影響を受け、古建築物保護にかんして、1927年に「折衷主義と柔軟性」を二つの判断要素とするという考えを発表し、それは1931年のアテネの国際会議で賛同されてアテネ憲章に組み込まれる。この考えは「各空間の破損度やそのときの状況に応</p>	

じて最も適切な作業を行う」というものであるが、裏を返せば非常に曖昧なものであり、厳密な判断尺度がなかったと捉えることができる。またトーレス・バルバスは、歴史的に正しくないものとして、コントレーラスが付加した装飾的屋根を撤去し、それ以前と類似の屋根を置くという修復を行った。たとえコントレーラスの修復後の形態がそれ以前になかったものであっても、作られた時点でそれは歴史の一部となるため、それを撤去することは一時代の様式の価値を認めないこととなり、トーレス・バルバスが一番嫌った「修復」になったと言える。

コントレーラスにとっての「修復」とは「造営期の状態に戻すこと」、「オリジナル」は「造営初期の状態」であり、ムスリムの手による建設時の姿を目指すべき理想形としていた。彼自身の記述には実は歴史主義的側面も認められるものの、結果として、理想化された恣意的なイスラムのデザインを引用付加したとされているし、その批判はもっともである。一方トーレス・バルバスの「修復」とは、「なるべく手を加えないようにしつつ、歴史的に正しい状態に戻し、修復箇所とそれ以前の箇所は区別できるようにすること」であり、それによって敢然と歴史主義を押し進めたと評価される。しかしながら彼自身の理論と実際の修復との矛盾点に着目すれば、対象とする建築によって、修復する度合いやその基準を変えるという柔軟な、もしくは曖昧な態度を取ったということが指摘できよう。それは庭園部分に対する修復においても同様である。そして造営当初の状態を念頭に置きつつも、他方では建築ごとに「オリジナル」が存在するという考えを持ち、個々の時代の様式を重視した。しかしコントレーラスの屋根の撤去はそれとは矛盾し、「歴史的に正しくすること」と「なるべく保存すること」というジレンマの中で、「折衷主義と柔軟性」同様に定義の不透明さを残している。

また彼らの出自や専門性は無意識下で彼らの価値判断に影響を与えた。「装飾修復家」であったラファエル・コントレーラスの一家はグラナダで有名な芸術家の家系であった反面、「建築家」であったトーレス・バルバスの家族は学者を多数排出していた。

【両者の限界】

以上から結論づけると、全欧的な修復理念に即して評価されてきたアルハンブラ修復家両名の修復は再検討の余地があると考えられる。コントレーラスは装飾重視の修復を行ったが、闇雲に自身の理想形態を現出させたのではなく、当時のロマン主義と結びつけ、アルハンブラ自体を観光、装飾モデルやミニチュアなどの派生品といった一大産業を生み出す資源と考えており、事業家としてもアルハンブラの修復に接していたと捉えることができる。各パティオの変遷の過程を歴史文学的に叙述している箇所や装飾への言及が多く、それがやや随筆的であるという点からもコントレーラスは自身が望んでいた建築家という立場ではなく芸術家、もしくは職人という括りに置くことができる。そして建築意匠は建築に付随する機能的なものとしてではなく、アルハンブラの性格を表すものであり、オリエンタリズムの装飾であるべきであると捉えた。それがコントレーラスの特徴でもあり、限界でもあった。

トーレス・バルバスは極めて考古学的に精密な実地調査と徹底的な文献調査を行い、修復を研究対象として位置付けるその態度はまさに建築家や考古学者、すなわち研究者のそれであった。修復家の想像が入る手前で作業をやめねばならない現代の修復理念から鑑みて、トーレス・バルバスの評価は現在揺るぎないものである。しかし彼が過去の一時代の建築物を排除したという点は看過できない。「折衷主義」という語によってアルハンブラの様式を統一することは不可能とし、「柔軟性」という語によって各空間に対するそれぞれの修復態度が必要であるとし、自身が介入できる幅を広げたトーレス・バルバスではあったが、そのために作業自体は妥協的なものとなった。彼の修復は様々な価値判断を同時に存続させるための一つの判断であり、可能な限り歴史的事実に添うような修復であったとされるものの、それこそが彼の限界を作ったとも言えるのである。

彼らは全く違う立場とコンテキストを持った人物であるものの、アルハンブラ修復という大きな枠組みの中で比較対象として俎上に載せられる。あえて概括的に彼らのアルハンブラ内における役割と特徴をまとめるならば、コントレーラスは工匠であり商売人であり、当時のイスラム、アラブ美術の愛好家の一人で、アルハンブラを一つのアラブ美術の完成体、言うなれば万国博覧会のパヴィリオン、もしくは美術館のようなものだと考えていたと言える。一方でトーレス・バルバスは考古学者であり建築家であり、近代修復の概念通りアルハンブラを研究対象として捉えていた。彼が博物館の重要性を謳ったのは、あくまで研究成果の展示及び後世への伝承であった。

このように両者は全く異なるバックグラウンド及びコンテキストを持ちつつも、修復に対しては類似の困難を抱え、結果として修復理念が彼ら自身の修復の実践と矛盾することもあった。結果として、旧来対立的に扱われたこの二人には実はある程度の類似点が見られ、彼ら自身の限界を超えることはなかったということが明らかとなる。そしてそれは現在のアルハンブラでも、そして修復界においても未だに超えられていない二律背反的な壁であると言えるのである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (佐藤 紗良)		
	(職)	氏 名
論文審査担当 者	主 査	大阪大学 教授 藤田 治彦
	副 査	大阪大学 教授 内田 次信
	副 査	大阪大学 准教授 三宅 祥雄
	副 査	大阪大学 准教授 高安 啓介
	副 査	神奈川大学 教授 鳥居 徳敏
論文審査の結果の要旨		
以下、本文別紙		

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： アルハンブラ宮殿修復史の研究 —19-20 世紀を中心に—

学位申請者 佐藤紗良

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	藤田治彦
副査	大阪大学教授	内田次信
副査	大阪大学准教授	三宅祥雄
副査	大阪大学准教授	高安啓介
副査	神奈川大学教授	鳥居徳敏

【論文内容の要旨】

アルハンブラ宮殿は南スペインのグラナダにある、ムスリムによって建設された王宮都市である。本論文はおもに同宮殿内の「コマレスのパティオ」及び「ライオンのパティオ」を対象として、19 世紀の修復家ラファエル・コントレーラス・ムーニョス (Rafael Contreras Muñoz, 1824-1890) と、20 世紀の修復家レオポルド・トーレス・バルバス (Leopoldo Torres Balbás, 1888-1960) の理念と実践、特に両者の「修復」や「オリジナル」の概念の違いの分析を軸としている。19 世紀から 20 世紀にかけては世界的に「修復」の概念が変化した、あるいは歴史的建築や都市の扱いが「修復」から「保存」に移行した時期であり、その傾向は、特定様式への統一を目指す「修復」から、全時代の様式を尊重する「保存」へと移る。

「ライオンのパティオ」東側パヴィリオン屋根を丸屋根に変えるなどの修復（実際には改造）を行ったコントレーラスによる 19 世紀の修復を批判的に見たトーレス・バルバスは、その思想と実践において「折衷主義と柔軟性」を重んじるようになった。本論ではトーレス・バルバスによる修復のあり方についても批判的に検証するなど、直接的かつ間接的にかかわるさまざまな資料を用いて考察を進め、論を展開している。トーレス・バルバスは、本来のアルハンブラ宮殿の姿を、調査を通じて確実に見出し、適切に修復できたかというところではなかったことは、特に「ライオンのパティオ」の歴史資料の比較調査等によって明らかにすることができた。

時代や社会の変化や文化的差異が彼らの実践の相違の背景にあったが、それだけではなく、両者の建築観も大きく影響していた。本論文ではコントレーラスとトーレス・バルバスがそれぞれ属していた社会や時代背景などについて詳しく調査することを通じて、そこから両者の建築観を深く掘り下げて論じた。さらに彼らの出自や専門性を比較することによって、それらが両者の異なった価値判断に大きな影響を与えていたと結論づけた。

【論文審査の結果の要旨】

佐藤紗良提出学位請求論文「アルハンブラ宮殿修復史の研究—19-20 世紀を中心に—」は、ラファエル・コントレ

ーラス・ムーニョスとレオポルド・トーレス・バルバスそれぞれによる、19世紀と20世紀前半に行われたアルハンブラ宮殿の修復を比較、それを中心に同宮の修復の歴史を再検証し、近現代スペインにおける歴史的建造物の保存と修復について独自の考察を行ったものである。現在のスペインの専門家の間では、歴史的証拠がないにもかかわらず「ライオンのパティオ」東側パヴィリオン屋根を丸屋根に変えるなどの修復を行ったコントレーラスを批判し、1934年にその丸屋根を方形屋根に戻すなどの修復を行ったトーレス・バルバスを高く評価するのが一般的だが、本論では後者の修復のあり方についても検証し、批判的に論じている。

本論が「折衷主義と柔軟性」というトーレス・バルバスの柔軟な姿勢や思想に注目しているところは適切だが、にもかかわらずコントレーラスによる丸屋根への改造を否定した疑問点についての考察はさらに進める必要がある。また、「修復」「保存」「保全」等の本論における重要概念の定義は示されているが、前半ではなく後半でようやく示されている定義もあり、論の展開には不十分などところもある。コントレーラスによる観光資源としてのアルハンブラの商業的活用については、より具体的な事例が確認できるなら、その指摘の価値は高まるであろう。また、トーレス・バルバスによるコントレーラスの19世紀の丸屋根等への改造への批判や修復については、現在のスペインではほとんど批判的に考察されていないにもかかわらず、本論では適切に批判されており有意義だが、やや遠慮気味のところもあり、研究論文としてはさらに率直に批判を展開してもいいように思われる。

アルハンブラ宮殿はムスリムによって建設された王宮だが、1492年のグラナダ陥落以降、カトリックの君主によって治められ、改造を重ねられてきた。スペインのみならず世界を代表するイスラム建築のひとつとも言えるが、その意味では、それ以後の増築、改装部分だけでなく、修復部分でさえ、キリスト教建築と言えなくもない。本論で注目している折衷主義との関係からも、それらについての考察もさらに深めるべきであろう。

以上のように、本論は、日本人研究者によって行われたアルハンブラの二人の代表的修復家の比較としてはもっとも徹底した研究であるが、さらに調査を重ね、考察を深めるべき側面が複数ある。しかしながら、以下に述べる点は、スペインにおける関連諸研究をも含む世界的観点からも、本論の独自な点であると認めることができる。

第一に、スペインでは批判されることの少ないトーレス・バルバスの思想と実践を、本論は適切に批判していることである。第二には、コントレーラスによる修復とトーレス・バルバスによる修復の最大の背景を、両者の出自に見出していることである。コントレーラスの一族は、コントレーラス自身を含め、建築家や画家など、広い意味での芸術家、つまり自ら創作を行う人々の集まりであった。それに対して、トーレス・バルバスは、建築の研究者であった。その父親は著名な地理学者で、王立歴史アカデミーの一員でもあり、兄弟はいずれも法律を学んでいる。コントレーラスによる修復は、厳密な歴史的修復というよりは、自らのアルハンブラへの思いをその一部として、修復の名を借りて実現した創作的改造である。それに対して、トーレス・バルバスによる修復は、研究者による歴史的事実を重んじた修復ではあるが、コントレーラスの創作的あるいは恣意的な修復から、無難ではあるが中途半端な状態へと戻したところも大いにあり、本論はそれも指摘し、論じている。

本論のもうひとつ有意義な点は、コントレーラスによる19世紀の修復を建築とその意匠あるいは装飾のそれであり、トーレス・バルバスによる20世紀の修復を中庭（パティオ）をも含む環境の修復と保存ないし保全として比較しようとしていることである。この違いは、ある意味でコントレーラスからトーレス・バルバスへの変化であるだけでなく、それぞれが属した19世紀から20世紀への変化でもあり、その個人と時代との関係についてもより明確に論じられるべきだが、その対比は本論内で示されており、今後の展開が期待される。

以上のように、本論は、十分論じられていない点や疑問点も部分的には残されているが、独自の観点を打ち出し、スペイン建築の専門家にも認められる、十分な数の適切な史料に基づいて分析、考察を進めており、博士（文学）の学位にふさわしいものと認定することができる。